

【氏名】中村 香子

【所属】(助成決定時)

京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】

「文化的他者」理解に関する人類学的研究：  
観光客と「マサイの戦士」の出会いの分析から

【研究の目的】

今日、世界のさまざまな地域では、イスラームとアメリカの対立に代表されるように、異質な他者との衝突や排除という現象がますます激化している。人類が「文化的他者」と多様なつながりをもちつつ、豊かに共存する未来はありうるのだろうか。誰もが望むそうした未来のためにわれわれ個人は何ができるのか。本研究の目的は、観光という身近な事例をもとにこの課題について考えることである。具体的には、観光客と「マサイの戦士」との出会いの分析から、(1)ステレオタイプな他者イメージが再生産されるメカニズムと(2)個人が、ステレオタイプを乗り越えて、自己と他者についての相互反照的な理解を獲得するメカニズムを明らかにする。

【研究の内容・方法】

観光に関する従来の人類的な研究においては、「観光のまなざし」論(アーリ 1989)に代表されるように、カネをもち「見たいものだけを見る」ためにやってくる観光客(ゲスト)とそれを受け入れるしかない現地の住民(ホスト)の力の不均衡が問題視されてきた。また、「文化の客体化」論(太田 1993,2001)は、こうしたゲストの「まなざし」を意識して、ホストがおこなう「演出」を「抑圧された構造下で、自文化やアイデンティティを構築(ネゴシエイト)する主体的で創造的な営み」としてとらえることにより、権力構造を中和する可能性を指摘して注目された。しかし、いずれの議論も、ステレオタイプを介したインタラクションのみを材料として、「ホスト—ゲスト」「弱者—強者」というように、両者を一枚岩の存在として提示してきたことにはかわりはなく、また、観光という営みをとおして、ステレオタイプを乗り越えた他者理解を獲得しうる可能性が論じられたことはなかった。本研究では、ホストとゲストの「演出された」インタラクションに加えて、人は個人的で偶発的な出会いをとおしてステレオタイプの拘束を打破し、自他に対する新たな理解を獲得するという仮説のもとに、こうした「舞台裏」の出会いも視野にいれて分析する。

現地調査は、アフリカ有数のビーチリゾート、ケニア共和国のモンバサ、マリンディを中心におこなった。ここに出稼ぎにやってくる「マサイの戦士」は、おもにヨーロッパから訪れる観光客を相手に「伝統的」なダンスを披露したり、ビーズの装身具を販売している。彼らの出稼ぎについての全体像を把握し、個々の「戦士」が観光客とどのような出会いを経験しているのかについての事例を、観察と聞き取りにより収集し、分析した。

### 【結論・考察】

戦士と観光客は、ダンス・ショーの会場、装身具の販売場面（ホテル内の店舗やビーチの露天）でもっとも多く出会っていた。ダンス・ショーはショーを管理・運営するホテルの経営者のつよい介入があり、「マサイ」は「マサイらしく」振る舞うことが要求され、個別の関係は築きにくい。装身具の販売場面では、観光客から個別の質問を受けたり、食事に誘われたりするなど、ビジネスを越えたインタラクションが存在していた。両者は、個別の友人関係や恋人関係を築いているケースもあった。

戦士と観光客の出会いには、ステレオタイプな他者イメージに依拠したインタラクションによってそれを再生産する側面と、ステレオタイプなイメージが破綻する／打破されるインタラクションが生起するという側面とが存在していた。前者の側面はこれまでに指摘されており、観光における権力作用という文脈で語るができるだろう。しかしながら、後者の出会いはそうした権力作用には還元できない個別の「出会い」となる。こうした出会いをとおして、個々人が相手に対するステレオタイプなイメージの拘束を打破し、新しい「他者理解」を手に入れているが、彼らはそのとき同時に、自己や自文化に対する認識も刷新していた。